

巻頭言

巻頭言のような、とくにテーマを絞り込まない方が良い原稿は実に書きにくい。そんな趣旨の文章を違う場所であったと思いますが以前書いた覚えがあります。当初は紀要発行に到る経緯について書こうかと思ったのですが、第十号の巻頭言で小林先生が本紀要の発行前に私との間で行われた議論について迄かなり詳細にネタバラシをして仕舞われたので特段申し上げることもなくなってしまいました。(笑)

さて、そうなると、何について書くかというのが大問題であります。少し違う話、と言うか全く自動車部品産業の関連で学術の発展に貢献することは絶対にない話でページを埋めさせていただきます。

大学院でスポーツ経営を専攻していた長男が修士論文の課題にプロ格闘技の経営課題を取り上げたいと言いました。経営学的な研究対象として格闘技を取り上げる場合、プロの格闘競技が経営体として成立している必要があります。選手が切符を手売りし、その売り上げがすなわちギャラ、選手はアルバイトしなければ食えないという、蛸が自分の足を食っているような状態では無く、プロとして生活できるだけの給料がきちんともらえる格闘技は興行が定期的に打っている相撲だけだと言うことで、相撲部屋の経営問題と人材育成を論文のテーマに取り上げる事になりました。

そこでとある方の仲介を頂いて長男をA部屋に紹介いただきみっちりインタビューなどをさせていただきました。以下は、長男の修士論文のおかげで親しくなったA親方の部屋で私が拾ってきたネタです。

小ネタその1

相撲部屋というと、一時期新聞報道にも出たことがありますが、部屋の中でのいじめとか過剰な体罰とかの問題がありました。いじめは自分がやられたことを人にやり返すという形でいわば体質として遺伝していきます。職場の雰囲気とか職場の伝統とか・・・まあそういったものを許容する空気が出来てしまうのですね。

ところがこのA親方は「自分がやられてイヤだったことは弟子にはしないし、させない」と明確な自己規律を持っておられました。又、部屋での稽古は広く取られた窓から通行人に丸見えにしてしまうなど、「他人の目」がいじめや暴力に対して強力な抑止力になるよう建物の作りにも気を配って居られました。稽古の過程も含め、**パワハラ防止の為に可視化**が行われているわけです。

小ネタその2

相撲は序の口→序二段→三段目→幕下→十両→幕内→小結→関脇→大関→横綱という階級で構成されていることはご存じですよね？階級の上下は本場所での通算成績が勝ちこしか負け越しか、上がる枚数は白星と黒星の差がどのくらいか（下がる時はその逆）によってのみ決まります。番付の上下は極めて客観的な評価の結果です。

稽古見学に部屋を尋ねると、大体7時半の時点で序の口、序二段下位の稽古は終わっています。ぶつかり稽古、三番稽古などは序の口は序の口同志、序二段は序二段同志という感じで基本ほぼ同じくらいの実力の相手から始めて徐々に上の人と当たると言うようになっています。力に差が有りすぎると却って稽古にならないし、弱い方が怪我をする恐れがあるそうです。

番付の差は稽古場だとよくわかります。序の口は序二段と当たると面白いように転がされ、その序二段は三段目とやるとこてんぱんに負け、三段目は幕下とやると全く勝てません。15番に1番くらいの感じじゃないでしょうかね、勝てるのは。

で、幕下は十両とやると又話にならず、十両は幕内とやるとこれまた話にならず……。カテゴリーの差は恐ろしいほどに実力差を反映しています。

A部屋では大関になる前の鶴竜関が出稽古に見えているのを拝見したことがありますが、まあ、何というか、実力の隔絶振りは凄まじく、素人目には結構強そうに見える幕下上位クラスでもまさに「鎧袖一触」

であっさり負けます。

で、この**実力差が番付に表示され俸給体系にぴったり連動**しているわけですから、まさに**実力主義の人事評価体系**が実践されている社会なのです。

テレビで幕内上位の相撲をご覧になるとほぼ同じカテゴリーの人同士の相撲ですからそれほど差があるとは思われませんが、実は番付一枚の差は計り知れない実力差の表示だと言うことが実によくわかります。さて、そう言う目で見ると、横綱という地位が如何にとんでも無い地位かはおわかりいただけるのではないのでしょうか？その横綱の中で一頭抜きん出ている白鳳関は一体どういう存在なのか、まさにしめ縄の向こう側にいる神に近いチカラビトだと言うことがおわかりいただけるかと思います。

小ネタその3

ぶつかり稽古は面白いシステムで、稽古で勝った方が土俵を独占でき、次の相手の指名権を持ちます。連続して相撲が取れるわけですが勝てば勝つほど体はきつく成ります。

だらしない奴なら適当に力を抜いて土俵を降りる工夫をするでしょうが、それをやると力はつきません。結局本人のやる気がその子の将来に直接リンクする練習システムになっているわけです。無論、各カテゴリーの上位にいる子は上のカテゴリーとも稽古をしなければ成りません。三段目上位にいる力士は、三段目同志で稽古をしたあと幕下の稽古にも参加します。まあ、強い人とやらないと経験値は上がら無いと言うこともあって、稽古量倍付けみたいな感じですね。疲労とは相談をしますが、出来るだけ土俵を降りたくないと言うのがまじめな力士の態度です。**労働に対する自発性の重要さがここまで徹底**している職場というのも珍しいのではないのでしょうか？

小ネタその4

番付がらみで面白いものの言い方を一つご紹介しておきます。

ある場所、A部屋の力士が6勝1敗で勝ちこし大きく番付をあげ、新しい地位では2勝5敗と負け越して直ちに自己最高位を陥落したとしましょう。

これを評した親方が曰く「今場所は家賃が高かった」。どことなくユーモラスな言い方ですが、実に言い得て妙でしょう？

さて、11月場所、何人の関取が家賃が高いと感じることになるのか、いずれにしても拮抗した良い勝負が見られると良いのですが。

ところで・・・

黒太字の所だけ綴って読んでみると、「パワハラ防止対策を含め労働内容が可視化され、その成果が完全な実力主義で俸給体系に反映される。さらに労働に対して自発性を持って取り組んだものだけが上位に上るチャンスを得る職場」ですね。実に立派な労働環境です。